

子どもを健やかに育てる環境を 社会全体で支えよう

西暦2002年から実施される学校の週5日制を見据え、文部省は「全国子どもプラン～緊急3か年戦略」を策定しました。これは、学校生活では得られない様々な体験活動を通じて、子どもたちを鍛え、健やかに育てようというものです。関係省庁や地方公共団体、民間企業などの協力の下で行われる同プランの内容について、文部省の富岡賢治・生涯学習局長に聞きました。

文部省生涯学習局長

富岡 賢治

日本テレビアナウンサー

山王丸 和恵

子どもを取り巻く環境が
様変わり

山王丸 いま、大人社会が経済不況ですごく揺れているときに、子どもの社会が何ともないというわけではないと思うのですけれども、いまの子どもたちを取り巻く環境について、どのような問題点があるかとらえていらっしゃいますか。

富岡 その背景としては、まず第一に少子化だと思います。結婚した人がだいたい二人の子どもを産むパターンはそう変わっていないようですが、結婚しない人が増えてきて、全体として少子化社会になる。その中で、昔のように子どもが地域社会の中で鍛えられるといった効果を期待できない時代になったということでしょう。

二つ目に、社会が目まぐるしく変化してきましたから、子どもたちがバーチャルな世界で育ってきており、本当の体験をして、強い心を持ってしっかり育つということも期待できないということです。

三つ目としては、生活に余裕ができ、いろいろな物が手に入りやすくなったため、忍耐することを覚えなくなったとか、自分



山王丸さん このプランがうまく回転していくためには、それを支える大人側の意識が変わらないとなりませんね



富岡局長 たくましい子どもを育てたいとみんなが思っていますから、きっかけさえつくればどんどん参加いただけるものと思います

で汗をかいて何かを手に入れていく努力を必要としなくなってきたといった、そういうものもあるでしょう。さらに、三年後の二〇〇二年度には学校が完全週五日制になりますから、土曜日、日曜日はお父さん、お母さんも子ども両方休みという家庭が

多くなります。日ごろ子どもにお受験だとか塾だとか言っている親でも、毎週土曜日、日曜日にずっと子どもを家の中で勉強させることがいいとは思ってはいませんか。

山王丸 そうでしょうか。

富岡 また、お父さんやお母さん自身も、土日の二日間を家でごろごろしてはいけないうちでいるでしょう。成人を対象にアンケートを取ってみると、充実感のある生活を送りたい、何か生きがいを見いだしたいという感覚の高まりが明らかに数字に出てきます。つまり、この機会にいろいろなことをしないと、ずっとこのまま変わらないだろう、という危機感を持っているのです。

山王丸 子どもを取り巻く環境が変わったというが、大人にとつて思いもかけない状況になってきているのかもしれない。

富岡 大人たちは、子どもは親の背中を見て育つことから、自分が一生懸命働いていれば子どもたちは分かってくれるし、ついてくるという感覚ではもういられないのです。すでに何も努力しなくても、子どもが自然に健やかに育つ状況ではないことを、みんなが気がついてきています。ですから、

話せば分かるということもできないけれども、話さなければやっぱり分からないという親子関係になってきて、よほど意図的、能動的に状況を変える努力をしないと、子どもにより環境を与えられない時代になったということではないでしょうか。

子どもたちに

人間関係を築く能力を

山王丸 では、いまの子どもたちにとって何が必要になってくるのでしょうか。

富岡 端的に言えば、子どもたちがいるいろいろな体験をするとか、切磋琢磨^{せつさくたくま}して鍛え合っていく状況をつくることではないでしょうか。つまり、最近の子どもは望ましい人間関係をつくる能力が弱くなっていますから、きちんとした人間関係を築いていく能力を身につけられるようなきっかけを意図的に与えてやらないといけません。例えば、体験活動と言っても、ディスカッションをすることから始まって、アルバイトをするとか、自然の中に入って年上や年下の仲間と様々な活動をするとか、ちよっと配慮してそういう状況をつくってあげることが大事だと思います。

行政的な課題として考えた場合、学校や地域でそういう体験学習ができるように意図的に配慮していくことが一番重要だと思います。ですから、学校では座学中心の一斉指導で教えればいいというのではなくて、同じ理科や社会を教えるにも体験的な学習によって知識を身につけさせる、そういう努力を併せてやらないといけないということでしょう。

家庭と地域の教育力を 見直す

山王丸 この度、文部省から「全国子どもプラン」が発表されましたが、「緊急三年戦略」とされているのは、三年後の完全学校週五日制の実施に係しているわけですね。

富岡 そうです。学校教育課程の基準が変わって、少しゆとりを持たせる教育にしましょう、併せて学校を完全週五日制にして、土曜日、日曜日は子どもを家庭や地域に返ししましょうという施策をとることになったのですが、このまま三年後を迎えれば、ゆとりができて体験学習ができるようになるかと言つと、このまま放はなつておいてはだめ

でしょうから、緊急に三か年の戦略を立てて、その間にできるだけやるうということなのです。それには、教育現場だけでできることは限られていますから、いろいろな人の知恵や手をお借りしようと、いま、関係各省市や民間企業、さらにボランティアや団体などにも問題を投げかけて、できるだけ協力していただきたいとお願している最中なんです。

山王丸 「全国子どもプラン」を拝見すると、地域というものがすごくクローズアップされているように思いましたが……。

富岡 おっしゃるとおりです。一番は家庭、それから、家庭を含む地域が大事でしょうが、我々、戦後の教育環境の中で、多少学校に頼り過ぎてきたようです。学校をより良くすることは相変わらず重要な課題ですが、もう一度家庭及びその地域の教育力の大切さを見直す必要があります。かといって、かつてのような地域社会が戻るわけはありませんから、意図的にも組織的にも工夫して、子どものための地域づくり、場面づくりをしていかなければいけません。



富岡 賢治 文部省生涯学習局長

とみおか けんじ/昭和21年生まれ。群馬県出身。44年文部省入省。青少年教育課長、高等学校課長、人事課長、大臣官房総務審議官などを経て、平成10年4月から現職。

山王丸 昔のような地域には、もう戻れないのでしょうか。

富岡 昔のように地域のお父さん、お母さんが地域の子どものをしつづけるということには、特に都市型社会の中では期待できないと思います。しかし、どんな社会の中でも、ある状況を子どもたちにつくってやることは可能ですから、そういう新しい地域の教育活動を工夫していこうということですね。

しかし、教育は間口があまりにも広く、その内容も多岐にわたる世界ですから、口で言うのは簡単でも、実行するとなるとそう簡単なことではありません。端的な話、日本中でまちづくりとか、地域の文化を発信しようとか、よく言いますね。でも、それ



はともするとお神輿みこしをかついで終わりにな
ってしまつたということがよくあります。
山王丸 まちづくり、むらおこしというの
は、なかなか実行が難しいようですね。

富岡 難しいでしょう。町のアイデンティ
ティをつくるのが、町の文化を発信するとい
うときには、自分たちの町が誇るものは
何なのか、地域はどう変わっているのかと
いうことをふだん勉強しておかないとでき
ないと思います。ですから、地域による子
どもの教育も、日ごろいろいろなネットワ
ークをつくっておいて、それを生かすよう
な努力が必要だと思えます。

「子どもセンター」は 地域の教育情報の受発信基地

山王丸 「全国子どもプラン」には、どの
ような事業が盛り込まれているんでしょう
か。

富岡 今年度予算に計上しているものがい
くつかありまして、一つは、「子どもセン
ター」というものを全国につくります。お
父さん、お母さんが地域のためにポランテ
ィア活動をしてみたいと思つていても、一
体どこへ行つたらそういう情報が手に入る

かが分からないと思えます。例えば、現在
でも各家庭には行政からの広報紙が届きま
すが、読んだ後も取っておく家庭は少ない
でしょう。いざというとき必要な情報は、
意外と手元のないものなんです。そこで、
お父さん、お母さん方が「教育に関する相
談をしたい」「情報を手に入れたい」とい
うときに、そういう情報を集めて伝えてい
ただくボランティアによる連携組織をつく
るのではないかと考えたわけです。

山王丸 情報提供の組織なんですか。

富岡 一番大きな役割は、情報提供でしょ
う。それから、問い合わせや相談に乗つて
いただくこともあります。そういう「子ど
もセンター」を全国の千ぐらゐの市町村に
置いていただく予定です。とい

うのは、全国に三千三百の市町
村がありますが、市が三百強で
すから、その市全部と、各郡に
一か所つくつて、地域のいろい
ろな活動の情報を集め、それを
お伝えする。具体的には情報誌
をつくつて、それをお父さん、
お母さんが必ず来るところに置
いておこうということなのです。



山王丸 和恵 日本テレビアナウンサー
さんのうまる かずえ / 秋田県出身。平成5年、
日本テレビ入社。「ジパングあさ6」(月～水曜
日の5時59分から)「3分クッキング」(月～
土曜日の11時50分から)などに出演中。

では、お父さん、お母さんはどこへ一番
来るだろうかと中央教育審議会で検討して
いただいた結果、皆さんがよく行かれるコ
ンビニエンスストアに置いてもらおうとい
うことになり、コンビニ業界も協力すると
言つてくださっています。

山王丸 なるほど。

富岡 そうしましたら、文部大臣が「コン
ビニもいいけれど、郵便局もどつたろつ」と
おっしゃったので、郵政省に相談したら、
喜んで協力してくれるというんです。

「子どもセンター」には電話やパソコン
を置いて、国や県からの情報、民間からの
情報が持ち込まれるようにします。そして
その情報をお父さん、お母さん方に提供す

る、例えば海や山へ子どもを十人ほど連れて行くときにオリエンテーリングの手ほどきをしてくれる方はいないだろうか、といった相談にも乗ってもらえます。

衛星通信を利用した 情報提供も開始

富岡 二つ目に、「子ども放送局」というものをつくります。これは、衛星通信を使って、全国の子どもたちが集まる場所にパラポラアンテナを置き、テレビに接続するものです。例えば、日本のロケットの実験場にカメラを持ち込んで、その第一線の研究者から、集まった子どもたちに「後ろに見えるロケットは来週打ち上げの予定だけれど、こいつという意味を持っているんだよ」と語りかけてもらうといった番組を放送するものです。いずれ双方向になりますから、「子ども電話相談室」みたいに、子どもからの問い合わせにも研究者に答えてもらうという事業も始めようと思っております。また、やがてはハワイの天文台やワシントンのスミソニアン博物館から日本の子どもたちリアルタイムで情報を流すことも考えています。

そのためのテレビを図書館に置こうと思っているのですが、例えば図書館は比較的子どもとお母さん、それに年寄りも集まるのではないのでしょうか。

山王丸 そうですね。

富岡 そういう方々が本を借りに来て、帰ろうと思ったらロビーのテレビで放送が流れている。「何だろう」と思ってふと足を止めてもらえればいい。科学技術に関心を持ってもらうよい機会になるのではないかと思います。それから、場合によっては子どもたちがバタフライナイフなんかを持っていて、誤って人を刺したらどうなるかが分かり、「ナイフを持つてはいけない」といった情報を全国に流そうと、すでにこの三月から実験を始めました。

関係省庁の協力を得て 広がる「全国子どもプラン」

山王丸 先ほど、各省庁の協力も得てというお話がありました。これはどういうことでしょうか。

富岡 例えば、最近の河川敷はだいたいコンクリートになっているでしょう。せいぜいサイクリングロードがあったり、たまに

野原があるぐらいで、子どもたちが遊べるような川ではないものが大部分です。そこで、これから河川改修するときには、タンポポが咲いていて子どもたちの遊び場になるような草原をつくるような形で改修できませんかと建設省にお願いしたところ、やってくれるというのです。来年四月から全国約五千か所で、教育関係者と河川の管理者とで相談して、そういう遊び場のあるような河川の改修事業を始めましょうということになりました。

山王丸 それはいいですね。

富岡 さらに、いま、公園などでは無断で木には登れないでしょう。場合によっては芝生にも入れません。そこで、多少けがをすることがあるかもしれないけれども、木に登れるような都市公園にしてくれませんかと建設省にお願いしたら、来年度から教育関係者と都市公園の設計者らで研究会を開き、プロジェクトを始めましょうと建設省が言ってくださっているんです。

山王丸 何年か前までは、自分でザリガニを捕ったりした経験のある方が、もっと大勢いたように思います。

富岡 奇しくもザリガニの話をされました



けれども、農水省にはまさにそういうことをお願いしたんです。文部大臣から、「昔は畦道せちみちがあつたではないか、そして、水の中に入って遊んだりザリガニを捕ったりした、そういうことができないか」というお話があつたので、農水省に話しましたら、研究しましょうと言ってくださつたんです。全国千か所で農業用水路のつくり方を見直して、子どもたちが遊べるようなあぜ道とせせらぎをつくるような事業をします。それから、林野庁も協力してくれる事業があります。山王丸さんもご存じのように、森林の保全業務はたいへんですね。山王丸 下草刈りや枝打ちなどですね。

富岡 環境保護のためにたいへんな努力をされている。そういう林野を保全する活動の場へ、子どもたちを連れていってくれませんか、専門的なことを教えてくれなくても、一日一緒にいさせてくれるだけでも、木の大切さとか、山の大切さを知ることになりますからとお願いしましたら、それを全国何百か所かでやると言っんです。参加したい子どもたちを募集して、グループ編成をするように各市町村や林野庁の森林管理局の担当者に声を掛けてみて、できると

ころから共同プロジェクトでやろうということになっていきます。

さらに、環境庁に対しては、国立公園の遊歩道を直したり案内標識をつくつたりと、通常専任の人やボランティアの人がやっている保全業務の場に子どもをグループで連れていってくださいとお願ひしたのです。

山王丸 レンジャーですね。

富岡 そうです。全国で十一の国立公園で、「子どもパークレンジャー」というものをつくつて連れていくということを、かなり大きなプロジェクトとして出していたことが決まりました。この四月から「国立公園で、何月何日、土曜日の朝八時に公園の入口とか駅に来てください、先着百名様を十のグループに分けて、レンジャーの方がそれぞれ十人の子どもを連れていきます」という活動を始めていただくことになっていきます。

商業体験活動は 商店街の活性化にもつながる

富岡 とこるで最近、市街地の商店街の活性化が話題になることが多いでしょう。

山王丸 近郊に大型店が進出して、古い商店街が閑散としてきているところもあるようです。

富岡 そこで商店街にお願いして、子どもの商業活動体験も実施することになりました。例えば洋服屋さんさんに小学生三人ぐらいが朝の九時から午後三時か四時までいて、「いらっしやいませ」と言つてお客をお迎える。もちろん掃除や、商品の包装などのサービス業務も経験させる。そうすることで、子どもは働くことを知り、しつても受けられる。一方、商店街は宣伝にもなるし、そのうちお母さん方も買いに来てくださるでしょう（笑い）。

山王丸 人が集まるようになりますね。

富岡 はい。そういうプランを中小企業庁にお願いしたら、最初は「本当に子どもが集まるの」と言つてましたけれども、実際に北海道から修学旅行に來た中学生が、一日はデイズニールランドへ行つて、その翌日は葛飾区の商店街に行つてその仕事を体験したのですが、いい経験をしたと言つ答えが返ってくるんですよ。これは兵庫県でもやっているそうですが、そういう事例もありますので、それを全国展開したいと思

って、全国商店街連合会へお願いしたら、喜んでやってくださるということになりました。更にそれが新聞に出ましたら、自分のところでもやりますと、多くの商店街が手を挙げてくださったんです。

山王丸 子どもにとっては幼稚園時代のお店屋さんごっこが、実際に仕事としてできるのですから魅力がもしれませんね(笑い)。富岡 引率してくださる方が、まず手を洗って、服装もきちっとして、「おはようございます」からちゃんと言いなさいとオリエンテーションをします。それから、子どもたちが三々五々商店街に散って、そこで鍛えてもらいます。

この事業はPTAの活性化のためにもあるから、PTAが商店街の入口まで引率したらどうですかと言いましたところ、積極的に協力してくださることになりました。この四月からは、全国の商店街で子どもたちからにぎやかに「いらっしやいませ」と言われることがあると思いますよ。

もっと社会全体が 子どもを育てる努力を

山王丸 最初は子どものためのプランとい

うことですが、各省庁とか民間を巻き込んでのまちづくりとか地域づくりにもつながっていくわけですね。

富岡 子どもたちが鍛えられて健やかに育っていくことは、地域の発展にもつながりますね。

それを大企業にもお願いしたんです。大企業では、夏休みにホテルの何部屋かを従業員用に借り上げたりするでしょう。そういう経費の一部分でいいから、従業員の子どもたちのために農家を借り上げるほうに回してくれませんかとお願したところ、従業員の中にも子どもで困っている方がいるでしょうし、家庭崩壊とまらないためにも、子どもたちを鍛えておかなければいけないということで、協力してくださる企業が結構あるのです。

山王丸 農家を借りて、具体的にはどういうことをするのですか。

富岡 具体的には子どもたちが夏休みに、一週間とか二週間、お父さんやお母さんから離れて農家に住み、その農家のお手伝いをして、身をもって農業体験をもらうのです。指導者には農家のおじいさん、おばあさんや農村青年になってもらう。そう

いうことをやってくださいませかと農協の青年部の方にお話ししたら、協力すると言ってくださいました。

山王丸 いろいろなところで、「では、やりましょう」という反応があるのは素晴らしいですね。

富岡 たいへんありがたいですね。去年、中央教育審議会で、いまの子どもの問題で、我が国で一番欠けているのは、次の世代を育てようという大人社会の意思である」という結論をいただいたんです。子どもたちを育てるための努力は大人自身がやらなければいけないでしょう、皆そういう努力をしていないのではないかと話していくと、そのとおりだということになって、協力してくださる輪が広がっていきます。

私は、我が国の社会はまだ捨てたものではないと思っています。その輪がどの程度広がるかはこれからの努力次第ですが、ともかくこの三年の間にこの事業を一気に進めたいと思っています。

山王丸 そのほかに企業に呼びかけていることはありますか。

富岡 いろいろなおことをお願いしています。お父さんの働く姿を見せたほうがいい



と、よく言うでしょう。お父さんの職場見学というのはいぶん進んできたのですけれども、お父さんの職場だけではなくてふつうの企業でも、一般の子どもたちに、大人が働いている姿を見てもらえるように、年に何回かでもいいから開放してくれませんかとお願ひしています。

それから、国立天文台では、年に何度か一般市民や子どもを対象にした受入事業をしているんです。望遠鏡のイロハも分らないお父さん、お母さんが子どもと一緒に来る。大学院の博士課程の研究者の卵が夢中になって説明して、夜八時までの予定が十一時ぐらゐまで教えていたりするわけです。

山王丸 それはたいへんですね。

富岡 はい。私も、最新のサイエンスの先端にいる優秀な若い人たちが、宇宙科学の「ウ」の字も分からない一般市民のために貴重な時間をつぶすのはいかなものかと思つたのですが、一方で現場の研究者が一般市民に説明できないようでは本物ではないし、また説明することによって知識を整理できるので、決してマイナスではないと言つたのです。

そこで、ほかの大学や研究所でも、第一線の研究を一般市民、子どもたちに見せてくださいということをお願ひしており、これも予算を計上して、支援しようと思つています。

体験の共有から生まれる 親子の会話

山王丸 このようなプランがうまく回転していくためには、それを支える大人側の意識が相当変わらないといけませんね。

富岡 地域の大人たち全員に子育てに協力しようという意識がなければ、職務が増えるだけでたいへんだということになると思います。しかし、それが回り回って自分たちの生活しやすい社会づくりになると私は思います。

それから、日本の博物館、美術館というのはほとんど見るだけで、座って写生したり手で触れたりできないでしょう。たしかに見ることも大事でしょうけれども、写生できたり触れたりする美術館づくりを目指してくれませんかとお願ひしているんです。

山王丸 本当に楽しみですね。私も子ども

に返ってみたいような気がしてきました（笑い）。

富岡 全国津々浦々にそういう動きが出てきたらありがたいですね。いろいろな体験活動に親子で参加したりすると、親と子の対話のきっかけになります。いま、「家庭での会話が大事だ」「子どもももっと話してください」と言っても、お父さんなどは、いまさら話すということに恥じらいがあるでしょうし、私自身もそうです。しかし、こういうプロジェクトにお父さんはボランティアとして参加し、子どもと体験を共有すれば、自然と会話ができるきっかけになると思っているのです。

山王丸 そうですね。

富岡 そのほかにまだまだいっぱい事業があります。どれも新規事業ばかりで、しかも三年間のうちに始めるのはたいへんなのですが、子どもを鍛えてあげたいとみんなが思っているわけですから、きっかけさえつくつていけば、どんどん参加していただけるようになると思います。

山王丸 私にも何かできることがあるかもしれないという気がしてきました。本日は、どうもありがとうございました。